

山田勘右衛門さんという人

山田勘右衛門さんは明治二十四年（一八九一）三月三十日に、上阿井山田万三郎の長男として生まれた。川西尋常小学校を卒業し三成村五か村組合高等小学校に入学した。一年後に阿井尋常高等小学校ができたので阿井に帰って高等科の課程を終えた。勘右衛門さんは非常にまじめであり、意志が強い青年に成長した。

彼は徴兵検査で不合格になったが、兵隊として社会に貢献できないかわりに、自分にできることがないかと考えた。当時上阿井掛ノ前一带の荒野が元は耕地であったが、酉の年の洪水で堤防が決壊し、石河原となっていることに気づいた。何とかしてこの広い場所を元通りの水田に仕上げようと考えたのだった。僅かの田地でも出来上がれば作れる米も多くなり国のためにもなると考え、実行に移すことにした。

彼は先ず、地主であった了瑞寺の承諾をもらい、わずかの所有田地と家屋敷を抵当に入れて、農工銀行から資金を借り入れて開墾の準備をした。開墾作業は、決壊した川の凸凹した荒地を平坦にするところから始まった。次に岩を取り除き、柳の株や二尺余りに達する小松林などを切り取って田地の形をつくった。石河原を埋めて田とするために必要な土の採取に手間取ったが、道路西側の山添いから土を得ることができた。

翌年以降も引き続き開墾に努め、翌年もまた来年もというように、何年も毎日作業したのであった。乏しい資金で人手を借り、朝早くから夕は遅くまで、雨の日も風の日も作業を続けた。

この間、大雨による川の増水によって築きあげた堤防は三回も決壊

した。借りた資金を返済できず裁判にかかったことも二回に及んだ。さらに、三人の子どもの病死、自宅が火事にあって全焼したため住む家もない、食うに食もないという有様だった。

「わしが勝手に思いついた掛けの前の開墾によって家の財産は残らず捨ててしまった。おまえ達には長い間苦勞をかけたことは申し訳ないが、これから先何時になったらおまえ達を幸福にしてやれるだろうか。開墾もまだ完成していないが、自分は石にかじりついてでもこの仕事をする。おまえ達は運がわるかったと諦めて離縁して他家に嫁ぐなど、どうか幸せな暮らしをしてほしい。子どもは自分が乞食をしてでも育てるから。」と、悲壮な宣告を家族にしたこともあった。

しかし、家族誰も家から出ようとすることもなく、共に一生懸命働いて家業に励み、勘右衛門さんの堅い開墾意欲を助け続けた。勘右衛門さんも家族に支えられ決してあきらめることなく働き続けた。

苦節八年、大正九年（一九二〇）の春には、一町三段もの美田を造りあげ、その秋には掛ノ前に黄金の波が打ち寄せた。勘右衛門さんはこのあぜ道に佇んで感慨深くながめ、初めて嬉しい微笑みを浮かべた。

勘右衛門さんは、その後も引き続き努力して田畑の改良を行い、失った財産を取り戻し、その後造林にも志し、杉や檜一万本を植え付け、将来のために尽くしたという。

